

バベルが大王であるならば、勿論此の榮譽は彼の荷ふべきものである。しかも茲に常に彼が理想の人と認められた英雄があつた。云はゞ大王の認めて大王とした人があつた。彼に先き立つこと一世紀にして、隻手世界の形勢を變造した蒙古の成吉思汗がそれである。彼の生涯は或は成吉思汗崇拜の跡であつたかも知れない。回教國、基督教國の歴史家は彼を目して人道の敵となし、頻りに攻撃の筆鋒を向けるものもあるが、しかし征略者として彼等の間に驚嘆せられ、英雄として崇拜せらるゝことも格別であつた。況んやその人の後は相別れて亞細亞の各地に君臨し、帖木兒の家の如きもその臣下としての一族長にすぎなかつたのである。此の際四方經略の志を抱いた帖木兒が先づ其の範を此の英雄に取つたことは、誠に自然の勢であらう。彼の所爲については、その消息を知り得べきことが澤山にある。例へば回教國では勿論回教經典程神聖なものはない。然るに帖木兒は成吉思汗崇拜の結果、此の英雄の法典として古から此の地方に傳へらるゝ札撒と稱するものを極端に尊重して、之を聖典と同視し、萬般のことを之に據りて定めやうとした。その結果終に回教僧侶の感情を損ねて、人爲の法を聖典と同様に見るが如きは異端者の所爲であるとの激烈な非難を受けたこともある。彼が蒙古族と稱し、末年の支那征伐の際にも蒙古恢復といふ名を立てたのも、此の成吉思汗崇拜と關係する處少くあるまい。

## 一一 帖木兒と宗教

最後に彼と宗教との關係を述べて此の敘述を終ることにする。彼が果して眞正の回教徒であつたか否かといふことは、常に彼の傳記を草するものゝ論ずる所である。そうしてかゝる議論の多くは、その所爲が經典の規定する處